

神の召し 一公現後第三主日 一

ダマスコ途上でイエス・キリストに出会う以前の使徒パウロに、もし出会っていたとしたら、それはどのような体験であったでしょうか。彼について私たちが知っていることは何でしょう。彼はユダヤ人であり、パリサイ人として厳格な教育を受けた人物でした。聖書に熱心に学び、既存の宗教秩序を守ることに強い情熱を注いでいました。

彼自身の言葉によれば、同世代の者たちよりも優れ、パリサイ派や神殿の指導者たちからも尊敬されていたと言います。また、パウロは既存の宗教秩序を守るためにあまりにも熱心であったため、ステパノが石打ちで殺されるのを認め、さらにダマスコでクリスチヤンを逮捕する権限を与える手紙まで持っていました。

クリスチヤンとして正直に言えば、そんな彼と時間を過ごしたいとは思わなかったでしょう。実際、パウロ自身が「クリスチヤンに対して脅迫の息を吐いていた」と語っています。

そのような背景を踏まえて、もしあなたが彼とコーヒーを飲みながら語り合う機会を得たと想像してみてください。彼は聖書の熱心な学徒であり、エネルギーと情熱に満ちあふれていたはずです。通常、そのような人物に出会うと、私たちはその熱意に引き込まれます。

しかし、彼の情熱を突き動かしていたのは、あからさまに否定的な目的でした。彼の目標は、見つけられる限りのクリスチヤンを捕らえ、エルサレムに連れ帰ってサンヘドリン（最高法院）の前に立たせることでした。

おそらく彼の中で最も際立っていたのは、深く搖るぎない使命感だったでしょう。彼は自分のしていることを絶対に正しいと信じていました——その瞬間までは。

天からまばゆい光が照らし、「サウロ、サウロ、なぜわたしを迫害するのか」という声が響いたとき、彼の自信も自己確信もすべて崩れ去ったのです。

私たちが「聖パウロ」あるいは「使徒パウロ」として知っている人物は、ダマスコへ向かう道で、あまりにも偉大で——あまりにも衝撃的な——出来事に直面しました。その出来事は、彼に目的と指針を与えていたこれまでの生き方へ、もはや戻ることを不可能にするほどのものでした。彼に立ちはだかったお方は、圧倒的な栄光に満ちておられ、パウロは古い人生に戻れないだけでなく、残りの人生すべてをかけてイエス・キリストについて世界に語り続けることになりました。聖パウロはその後、会堂で、裕福な商人たちの前で、看守の前で、ローマの役人の前で、ユダヤの指導者たちの前で、王たちの前で、そしてついには皇帝の前でさえ、神の恵みの証しを語りました。

ローマ帝国全土の異邦人に対して聖パウロが行った働きは、その後ずっと、司教、牧師、教会開拓者、宣教師たちの熱心な研究対象となっていました。

確かに、人々はパウロの方法や神学を研究してきました。しかし、もし聖パウロ本人が私たちに語るとしたら、「私がどうしてそう動いていたのかを分析するのは時間の無駄だ」と言ったでしょう。なぜなら、彼自身が何によって突き動かされていたのかを、はつきり語っているからです。

ダマスコ途上でイエスと出会った後、聖パウロを突き動かした唯一のもの——それは「キリストの十字架」でした。

パウロにとってキリストの十字架は、罪深い人類を律法の死の支配から贖い出すという、神の計画が展開する中の中心であり、決定的な瞬間でした。

神学的な精密さや鋭い牧会的洞察の背後にあったのは、ただ一つの単純な彼のメッセージは、「本当に大切なものはすべて、イエスのうちにある」ということでした。

マタイによる福音書4章の冒頭で、イエスは洗礼を受けた後、御靈に導かれて荒野へ行かれました。イエスは荒野で祈りと断食の時を過ごされました。四十日間、イエスはイスラエルの民が四十年間荒れ野をさまよったのと同じほど厳しい荒野の生活に耐えられました。四十日の断食の終わりに、イエスはサタンから誘惑を受けました。サタンはイエスの「食欲」「承認欲求」「野心」に訴えかけて誘惑しました。

しかしイエスは、悪魔が罪へと引きずり込もうとする試みにすべて打ち勝ち、ユダヤへ戻られました。

ところがその間に、バプテスマのヨハネは、ヘロデの罪深い関係を非難したために逮捕されていました。ヨハネのもとに押し寄せて群衆は皆家に帰ってしまい散り、イエスは人々のいるところへと出て行かれたのです。

今朝の福音書の箇所では、イエスが公の宣教活動を始め、最初の弟子たちを召し出す場面が描かれています。イエスのメッセージは驚くほどシンプルです。

「天の御国が地上に来た」——その宣言です。

旧約の預言者たちが長く語り続け、そして最近ではバプテスマのヨハネが告げていたその御国は、もはや未来の出来事ではありません。栄光の主イエス・キリストご自身が来られたのです。この宣言を聞いた人々は、悔い改め、御国に入るよう促されました。

聖書の記述によれば、彼らは「死の陰に住む民」でしたが、そこに福音の光の夜明けが差し込んだのです。

イエスは「神の国」を宣べ伝えましたが、その中心におられるのは他でもないご自身でした。

イエスは、暗闇に住む者たちにいのちの光をもたらすために天から来られた神の御子です。

イエスの宣教の目的は、人々をその御国へと集めることでした。

そのメッセージは明確です。「悔い改めなさい。向きを変えて、御国に入りなさい。」

説教者としてイエスは御国を宣言しましたが、気まぐれな群衆の反応を待つことはありませんでした。

マタイ4章18-22節で、イエスがペテロ、アンデレ、ヤコブ、ヨハネに与えた召しは実にシンプルです。「わたしについて来なさい。」

ペテロとアンデレに語られた召しの後半部分（「人間をとる漁師にする」）はよく注目されますが、この箇所の焦点は弟子たちが何になるかではありません。

焦点は「召し」そのものと、「召すお方」にあります。

私たちがキリストの召しに応えるとき、そこにあるのは明確に定義された任務への招きではありません。キリストに従うようにと呼ばれているのです。

キリストの召しをより深く理解するために、マタイ4章18-22節を通して、

1. イエスが弟子たちに与えた「召し」

2. そして「召すお方」

この二つに目を向けていきましょう。

先ほども述べたように、この聖書箇所がよく知られているのは、イエスがアンデレとペテロに語られた言葉の後半——「あなたがたを人間をとる漁師にする」という部分のためです。

イエスはこの状況を用いて、シモン・ペテロとアンデレに語りかけておられます。この言葉遊びは、イエスが彼らに網を捨てさせて召し出したことに、明確な目的があったことを示しています。

荒削りなガリラヤの漁師であった彼らは、潮の流れを読むこと、最良の漁場を見つけること、獲れた魚を最も高く売る方法を熟知していました。

しかしこれらの技術は、牧会的な思いやり、神学的な深み、そして周囲の人々にキリストを知らせる熱意へと置き換えられていくことになります。

とはいって、ここで重要なのは、イエスがペテロとアンデレを「人間をとる漁師になるように」と召されたのではないという点です。

確かに、イエスが彼らの人生の中で行われることの一つは、彼らを人間をとる漁師にすることでした。シモン・ペテロとアンデレは、福音の光を携えて暗闇の中へ出て行き、人々を御国へと招くようになる——ちょうどイエスが彼らに対してなさっていたことと同様でした。

しかし、イエスの召しは、彼らが特別に定められた任務を果たすことや、大勢の新しい信者を獲得することを前提にしたものではありませんでした。

イエスの召しはそれよりもはるかに単純でした。

イエスがアンデレとペテロに実際に命じられた言葉、それは「わたしについて来なさい」でした。文の構造を見れば、そのポイントがさらに明確になります。

イエスの言葉の前半は「命令」あるいは「召し」です。

後半は、イエスが彼らのうちに、そして彼らを通して行われることです。

つまり、彼らは「人間をとる漁師になるように」召されたのではありません。

彼らはイエスに従うように召されたのです。「人間をとる漁師」への変化は、イエスに従うことの結果として起こります。ここをはっきりさせる必要があります。

強調されているのは、イエスが弟子たちをどんな働きへ導かれるかではなく、イエスがどこへ導かれるとしても、彼らが従うことなのです。

福音書の中でイエスが弟子として生きることについて語られるとき、

「あなたがたの中には牧師になる者も、伝道者になる者も、宣教師になる者もいる」とは言われません。イエスが与えられた召しはただ一つ、「わたしに従いなさい」でした。

イエスご自身は、この「従う」という召しをさらに深めるために、

「自分の十字架を負いなさい」

「自分のいのちを救おうとする者はそれを失う」

「わたしのためにいのちを失う者はそれを見いだす」

といった言葉を用いました。

これらの言葉は、イエスに従うことには代価が伴うことを示しています。

その代価は非常に高いように思えますが、ではどれほど高いのでしょうか。

ご存じのように、多くの宗教は、善行によって救いを得るよう人々に求めます。

その善行のリストは複雑な場合もあれば簡単な場合もありますが、いずれにせよ来世の報いを得るために、そのリストをこなさなければなりません。

しかし、キリスト者にとって救いの代価とは、自分の人生すべてを神にささげることです。

他の宗教の基準が高すぎるのではなく、むしろ低すぎると言わざるを得ません。

いくつかの善行や献金など、人生全体と比べれば取るに足りないものです。

とはいって、私たちの罪に満ちた人生は、誰一人救うことができません。

自分自身の救いでさえ不可能です。私たちは自分の人生を永遠の救いと引き換えることはできません。なぜなら、私たちを罪に定めているのは、まさに私たち自身の罪だからです。

しかし、世界のために自分のいのちを差し出すことができる方が、ただ一人おられます。そしてその方は、すでにそれを成し遂げられました。

私たちの主イエスは、私たち自身では決して成し得なかったことを成し遂げてくださいました。神の完全な義の基準を満たすために死なれ、

私たちを神の所有とし、聖なる民としてくださったのです。

この世界における人々の大きな区別は、もはや生まれた場所、言語、経済的地位によって決まるのではありません。

世界は、イエスに従う者か、そうでない者かという線で分かれています。

イエスの完全な犠牲、栄光の復活と昇天によって、私たちは新しいいのちに生かされ、イエスに従う者とされました。

ですから、イエスが私たちに「わたしについて来なさい」と言われるとき、それは御国に入るための善行リストをこなすよう求めているではありません。

イエスは、私たちをご自身と共に、またご自身のうちに歩ませ、私たちのためにご自身のいのちをささげられる十字架へと招いておられるのです。

ですから、イエスの召しは「簡単」ではありませんが、実にシンプルだと言えます。

イエスが導かれるところへ、どこへでも従うこと。

私が申し上げているイエスの召しは、これまで皆さんがあらの人生に与えられていると理解してきた神の召しとは、必ずしも同じではないかもしません。

私たちは皆、人生の中でどの道を進むべきかを示してくださいるようにと、神に祈ってきました。どんな仕事に就くべきか、誰と結婚すべきか、どこに住むべきか——そのような決断のために祈ってきました。

では、神が私たちの人生に何を求めておられるのか、どうすれば分かるのでしょうか。

人生の召しについて語るとき、まず覚えておくべきことは、神の完全なご計画は、しばしば私たちには分からず、後になって振り返って初めて見えてくるということです。

多くの場合、最も良い歩み方とは、聖書を読み、祈り、主が与えてくださる機会の中で仕えることです。そして主に仕えていると、歩むべき道が自然と開かれていくということに、私たちは驚くべきではありません。

さらに重要なのは、私たちの人生の「召し」とは、イエスが私たちをどの道へ導かれるかという“道そのもの”的ことではない、という点です。

イエスに従うという召しは、何よりもまず「私たちを召しておられるお方」そのものに関わるものです。

私たちの目的は、イエスが導かれる道の上で意味や目的を探すことではありません。

もう一度、イエスがペテロとアンデレに語られた言葉（マタイ 4:19）を見てみましょう。

イエスはこう言われました。「わたしについて来なさい。」

神の御子ご自身が、彼らに「わたしに従いなさい」と呼びかけておられるのです。

イエスは、ご自身を追い求めるべき対象として示しておられます。

ペテロ、アンデレ、ヤコブ、ヨハネは、家族を養う責任を負った大人でした。

彼らは、家業がもたらす安定を捨てて、宗教的な職業に意味を求めるようなタイプではありませんでした。

もし彼らがパリサイ派の地位に就くような人物であったなら、とっくにそうなっていたはずです。

実際、彼らの落ち着いた普通の生活は、イエスに従うという召しによって突然中斷されました。

ここで思い出しておくべき大切なことがあります。

イエスは、洗礼を受けた直後の数日以内に、すでに彼らと出会っていたのです。

アンデレとペテロは、ヨハネのもとに行って洗礼を受けました。

そのときアンデレは、来るべきメシアについてヨハネが語るのを聞いていました。

そこへイエスが通りかかり、ヨハネはこう宣言しました。

アンデレとペテロは洗礼を受けるためにヨハネのもとを訪れました、そしてアンデレが来たるべきメシアについてヨハネの教えに耳を傾けていたそのとき、イエスがそばを通りました。

「見よ、世の罪を取り除く神の小羊。」

この宣言を聞いたアンデレは、ヨハネのもとを離れてイエスに従いました。

そしてその言葉をペテロに伝え、二人でイエスに会いに行きました。

そのときイエスは、シモンに初めて「ペテロ」という名を与えられました。

洗礼の後まもなく、イエスは断食と祈りのために荒野へ行かれました。ユダヤへ戻られたとき、イエスはバプテスマのヨハネが捕らえられたことを知りました。

ヨハネの逮捕によって群衆は散らされ、イエスはガリラヤへ戻されました。

福音の光がガリラヤに差し込もうとしていたのです。

その昇りつつあった光こそ、イエスご自身であったのです。

ですから、イエスがシモン・ペテロとアンデレのもとに歩み寄り、「わたしについて来なさい」と呼ばれたとき、彼らはイエスが誰であり、何者であるかを知らなかつたわけではありません。

彼らがすべてを捨てて従う決断をしたのは、奇跡を行われ、世の罪を取り除く神の小羊としてのイエスを、すでに知っていたからです。彼らは、愛されている神の御子の召しを聞き、網を捨ててイエスに従いました。

初期の弟子たちと同じように、私たちもイエスに従うように召されています。

イエスが私たちをどのような道へ導かれるのか、その詳細を知ろうとすることは、シモン・ペテロやアンデレにとって難しかったのと同じように、私たちにとっても難しいことです。

しかし、簡単なことが一つあります。

私たちが誰に従っているのかは、はつきり分かっているということです。

イエスは肉体をもって来られ、食べ、飲み、自分が誰であるかを世界に告げられました。

権威ある宣教と、他の誰にもできない神の力の現れを通して、ご自身を示されました。

イエスはとても優しく、傷ついた葦を折ることもなく、かすかに燃える灯心を消すこと也没有。

しかし同時に、現実そのもの、真理そのものの礎石です。もしその方につまずけば、私たちは打ち碎かれます。イエスは心の傷ついた者を包み、貧しい者、乏しい者を祝福されます。

高ぶる者には立ち向かわれ、私たちの罪深い心の思いや意図に至るまで、すべてを裁かれます。

イエスは栄光の主であり、全世界がその御前にひざまずく方です。

王の王であるイエスは、私たちを御父のもとへ連れて行くために、ご自身の王座を離れ、私たちの身代わりとして死なれました。

その日、シモン・ペテロとアンデレが聞いた召しは、「イエスに従うこと」でした。

何と比べても、イエスはただ「より良い」のです。私たちの献身と愛の対象として、イエス以上に高く、良いものを想像することはできません。

ですから、召しとは、自分自身をイエスにゆだねることです。

それは一見、危険なことのように聞こえるかもしれません。

「自分の人生のコントロールを失ってしまうのではないか」と。

しかし、その問い合わせへの短い答えはこうです。

「そもそも、あなたは自分の人生をコントロールできていたことがあったでしょうか。」

聖パウロの人生を思い返してみてください。彼はクリスチヤンを迫害していたとき、自分が人生の正しい道を歩んでいると絶対的に確信していました。

彼が下す決断はすべて、彼が尊敬すべきだと信じていた人々から称賛されていました。

つまり、彼が自分の心の中に承認を求めようと、他者からの承認を求めようと、

「自分は正しいことをしている」と言えたのです。——イエスに出会うその瞬間までは。

イエスが彼の人生に突如として介入されたとき、聖パウロの人生は完全に崩れ去りました。

彼が人生について描いていたすべての計画は、根底から覆されたのです。実のところ、私たちは自分の人生を思いどおりに支配することはできません。私たちが勤めている会社が、別の場所へ移転することもあります。閉鎖されることもあります。嵐が襲い、住まいを破壊することもあります。突然の病が、人生の大切な年月を奪うこともあります。また、新たな情熱を見いだし、それによって思いがけない方向へ導かれることもあるのです。

イエスの召しとは、人生の浮き沈みすべてを通してイエスに従うことです。

シモン・ペテロもアンデレも、イエスへの信仰のゆえに殉教しました。

ペテロに至っては、逆さ十字架で処刑されたと言われています。

しかし彼らの死は、人生を無駄にしたことを示すものではありません。

彼らは、自分では決してコントロールできなかつた「いのちそのもの」を捨て、イエスの足跡に従う道を選んだのです。

では、私たちは今どうすればよいのでしょうか。答えは 2000 年前と変わりません。

イエスに従うことです。イエスに従うことは、想像もしなかった道へ導かれることがあります。

そして実際、すでにそのように導かれてきた方も多いでしょう。今朝あなたがこの場所にいるのは、主イエスがあなたをここへ導かれたからです。

では、主はあなたの人生にどのような働きをなさるのでしょうか。

それを確実に言い切ることはできませんが、確かに言えることが二つあります。

第一に、イエスは、ご自身がすでに通られたことのない場所へ、私たちを導くことはありません。イエスに従うとはどういうことでしょうか。それは、イエスが私たちの前を歩いてくださるということです。イエスは弟子たちに、ご自身が十字架へ向かうことを告げられました。

そして弟子たちにも「自分の十字架を負いなさい」と言われました。

私たちはイエスを通してキリスト者の歩みに入れられ、その後の人生をイエスと共に歩むように招かれています。イエスは私たちをさまざまな道へ導かれるかもしれません。

しかし、マタイ 28 章 20 節で約束されたように、「世の終わりまで、いつも共にいる」のです。

イエスは決して私たちを見捨てず、離れません。私たちを救うために自らのいのちを捧げた、真の兄なる方です。

だからこそ、どのような道であっても、イエスは必ず良いところへ導いておられる、と信頼することができるのです。

第二に、私たちが抱くことのできる確信は、イエスが導いておられる「行き着く先」は、私たちが心から望む場所だということです。 したがって、イエスが導かれる道について恐れる必要はありません。私たちはイエスに従うように召されており、そしてイエスがどこへ導いておられるのかを知っています。それは、義の道を通り、新しい天と新しい地へと至る道です。

そこでイエスは私たちの神となり、私たちはその民となり、永遠に主と共に住むのです。

行き着く先が確かなものとされているゆえに、私たちがイエスに従って歩むどんな道であっても、主イエスが必ず私たちを守り、導き通してくださいと信頼することができます。

主イエスご自身が、私たちのいのちを守り、イエスに従い続ける決意を強めてくださいますように。

祈りましょう。

主よ、恵みをお与えください。

救い主イエス・キリストの召しに、私たちが喜んで応え、

その救いの良い知らせをすべての人々に告げ知らせることができますように。

それによって、私たちと全世界が、

主の驚くべき御業の栄光を悟ることができますように。

父と聖靈とともに、

唯一の神として生き、治められる主に、

世々限りなく。アーメン。